

日本語のポライトネス : 異文化理解教育の方法開発 に向けて

松村, 瑞子

<https://hdl.handle.net/2324/1398456>

出版情報 : 九州大学, 2013, 博士 (芸術工学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 松村 瑞子

論文題名 : 日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—

区 分 : 博士 (乙) 論文博士

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語のポライトネスを題材として、異文化理解の教育方法論を提示した。先ず第 2 章で先行研究を概観し、本研究の立場を述べた。第 3 章では、この論文で使用したデータの種類および収集法についてまとめた。第 4 章以降が本論である。本論を 2 部に分け、第 I 部 (第 4 章～第 10 章) では、理論編「談話分析に基づく日本語のポライトネス研究」と題して、様々の角度から日本語のポライトネスについて分析を行い、その特徴を明らかにしていった。第 II 部 (第 11 章～第 15 章) は応用編「日本人の言語行動におけるポライトネス—効率的な日本語ポライトネス指導法を目指して—」である。依頼・勧誘と断り、謝罪、褒め、不平・不満・不同意表明、感謝という言語行動における日本語ポライトネスについての、日本語母語話者と日本語学習者の認識の違いを明らかにし、教授内容を特定することで、これらの言語行動における日本人のポライトネスを教授するために実践的教育法を提示した。本論文での教育方法を利用することで、異文化をもつ日本語学習者が日本文化に対する理解を深めていき、日本語教育の現場から多文化共生を目指すことを期待することができる。

第 I 部では、日本語教育の現場に還元することを目指して、様々の角度から日本語ポライトネスを考察していった。第 4 章では、日本語のスタイルの交替を分析することによって日本語のスタイルは初期条件によって固定化されるものではなくダイナミックに交替していていることを論じた。

第 5 章では、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論では日本語のポライトネスは十分には説明できないことを論じた。

第 6 章では、日本語のポライトネスにおける「わきまえ」の重要性を再確認した。3 タイプに分類された 12 種類の会話を分析しながら、日本語においては、(1)「わきまえ」としてのポライトネスと、(2)「ストラテジー」としてのポライトネスがあり、日本語会話におけるポライトネスは、「わきまえ」を遵守しつつ多様な「ストラテジー」を使用するという複合的な方法によって実現されることを論じていった。

第 7 章では、先ず日本語と同様、韓国語・中国語のポライトネスにおいても「わきまえ」が重要な役割を果たしていることを述べた。次に、韓国人・中国人・台湾人が奇妙に感じた日本語のポライトネスの例を挙げながら、日本語のポライトネスと韓国語・中国語のポライトネスの類似点・相違点について論じていった。

第 8 章では、韓国人に対する日本語教育に生かすために、日本語と韓国語のポライトネスの対照研究を行った。日本人のポライトネスのうち韓国人が異なると感じるものをデータとして収集し、それが日本人と韓国人のどのような相違から起こるものであるかについて考察した。

第 9 章では、日本語配慮表現指導教材開発に向けて、10 代～50 代の日本人および中国人に対する日本語配慮表現に対するアンケートを基に、日本語配慮表現に対する認識の相違を明らかにした。10 代～50 代の日本人および中国人に対するアンケートを基に、日本語の配慮表現に対する認識の相

違を調査分析し、その相違を明らかにした。

第 10 章では、「聞き手志向」という観点から、日本語ポライトネスとは何かについて論じていった。日本語学習者にとって違和感のある日本語ポライトネスおよび日本人にとって違和感のある日本語学習者のポライトネスをデータとして、日本人と日本語学習者の意識の相違を特定し、「聞き手志向」の日本語ポライトネス指導教材開発に向けた考察を行った。

第 II 部では、日本語ポライトネス指導のための実践的教授法の提示を行った。第 11 章では、日本人と学習者の勧誘・依頼および断り方略に対する認識の相違を明らかにした上で、自然会話を素材とした効率的な日本語ポライトネス指導法を提示した。

第 12 章では、日本人と学習者の謝罪行為に対する認識の相違を示した上で、日本人の謝罪行為の効果的指導法とは何かを考察した。

第 13 章では、褒めの定義および先行研究を概観した後、先ず日本人の褒めの例を挙げながら、褒めに関連する文化差について考えていった。次に、日本人は褒めているつもりだが、誤解される可能性の大きい褒めを提示し、その教授法を示していった。

第 14 章では、学習者にとって最も困難な行為の一つである不平・不満・不同意の表明について論じていった。実際の会話において日本人がどのようなやり方で不同意を表明するかについて観察・分析することで、日本人の不同意表明について考察し、日本語学習者への教育方法を示した。

第 15 章では、感謝行為について論じた。先ず、日本人がどういう場面で感謝を期待しており、そのような場面で感謝が行われなかった場合どのように感じられるのかについて論じていった。次に、学習者が理解しにくい日本人の感謝表現を挙げながら、効果的な日本語教育方法を示した。

第 16 章は結論である。本論文の論旨を述べた後、その学術的意義を以下の 3 点にまとめた。即ち、先ず日本語の自然会話を談話分析することで「わきまえ」と「ストラテジー」のポライトネスを複合的に組み合わせながらダイナミックに発達していく日本語ポライトネスの特徴を示すことができた点；次に、日本語ポライトネスについての日本語母語話者と学習者の認識のズレを特定し、そのズレを引き起こす要因についても分析した点；最後に、多様な言語行動における日本語ポライトネスについての母語話者と学習者の認識の相違を明らかにし、この認識の相違に焦点をあてた実践的日本語ポライトネス指導法を提示した点、の 3 点である。

Name: Yoshiko MATSUMURA

Title: Linguistic Politeness of Japanese:
 A Study Aimed at Developing Effective Methods to
 Promote Intercultural Understanding

This dissertation studies linguistic politeness of Japanese, aiming to develop effective methods to promote intercultural understanding. It consists of sixteen chapters. In Chapter 1, the author proposes the purpose and the structure of the dissertation. Chapter 2 reviews the leading literature and states the position of this study. Chapter 3 shows the data to be used and its collecting methods. The main chapters are divided into two parts. Part I (Chapters 4 to 10), which is named “Discourse-based Study on Japanese Politeness,” analyzes linguistic politeness of Japanese from various points of view. Chapter 4 studies the actual conditions and the effects of the switch between plain and polite forms. Chapter 6 proves the importance of Discernment in the Japanese politeness. Chapter 7 contrasts Japanese politeness with Chinese and Korean politeness. Chapter 8 shows the difference in recognition on Japanese politeness between Japanese and Korean people. Chapter 9, based on a questionnaire conducted on Japanese and Chinese people, proves their difference in recognition on Japanese considerate expressions. Chapter 10 demonstrates the hearer-centeredness of the Japanese politeness. Part II (Chapters 11 to 15), “Japanese politeness in some speech acts: aiming at developing an effective teaching methodology,” aims at showing an effective way to teach Japanese politeness, by focusing on the difference in recognition between Japanese people and Japanese learners. Chapter 11 studies invitation / request and refusal strategies, Chapter 12 expressions of apology, Chapter 13 expressions of praise, Chapter 14 discontent and disagreement strategies, and Chapter 15 gratitude expressions, respectively. As is illustrated by Szatrowski (1993) and Ide (2006), some behaviors can be polite and considerate in a culture but impolite and offensive in another culture. In order to understand some linguistic behaviors in a different culture properly, i.e. to understand whether they are polite or impolite, we need to recognize different conventions of the culture (Spencer-Oatey 2000). Some learners find it very hard to behave politely because they don’t know the different conventions. Therefore, these chapters conducted a research to identify the difference in recognition between Japanese people and Japanese learners and to develop a way to teach politeness focusing on the difference. The result shows that Japanese learners find it hard to recognize the politeness strategies used by Japanese people. Based on the result, a method of teaching Japanese politeness has been developed, by urging learners to pay attention to the difference in recognition and to act politely in Japanese. Chapter 16 is the conclusion of this dissertation. While this study has been conducted from the educational viewpoint, the result will lead to show what underlines politeness in Japanese and in other languages, and to promote mutual understanding.